

アモス書 第8章 4-7節

テモテへの手紙一 第2章 1-8節

ルカによる福音書 第16章 1-13節

本日は、「子どもとともにささげる聖餐式」であり、「敬老のお祝い」の礼拝でもあります。それぞれ多くの教会で行われる礼拝ですが、同じ礼拝の中で行うのは、初めての経験です。しかし、教会というのは、幼子から人生の大先輩までが、主なる神様の前に集められる時間と空間です。その意味では、本日の礼拝こそ、本来の教会の礼拝のあり方だと思います。ただし、聖書日課は、とくにその趣旨に即した箇所ではありませんので、聖書日課固有の使信を学びます。

本日の旧約日課は「アモス書」です。アモスは、紀元前8世紀ころにイスラエル（北イスラエル王国）で活躍した預言者です。「アモス書」のすべてがその時に書かれたとは言えませんが、時代の事柄が反映されていることは確かです。またアモスは、社会正義の預言者とも呼ばれ、主なる神様を恐れず、貧しい人びとを苦しめる人びとに対して、厳しい神の言を語りました。

7章からヤコブ・イスラエルの不正義に対する、裁きと災いに関する幻が5つ続くのですが、本日の箇所はその4番目が示された後にあります。また、本日の箇所の後は、終末の日・裁きの日を想像させる「その日」の到来についての言及があります。本日の箇所も、その流れの中で不正を働く人々の批判が書かれているのですが、彼らの不正とは何であるか、それが具体的に書かれています。

5節から6節に、「お前たちは言う。「新月祭はいつ終わるのか、穀物を買りたいものだ。安息日はいつ終わるのか、麦を売り尽くしたいものだ。エファ升は小さくし、分銅は重くし、偽りの天秤を使ってごまかそう。弱い者を金で、貧しい者を靴一足の値で買い取ろう。また、くず麦を売ろう」とあります。「新月祭、安息日」は、イスラエルの祝日・祭りの日ですが、同時に働いてはならない日です。アモスが批判している人たちは、その祭りの終わりを待ち望みつつ、終わったら升、分銅、天秤をごまかして、不正を働いて富を築き、また律法では許されていない、同胞を奴隷とすることを考えているのです。

これらのアモスの批判の言葉から、不正を働く人々が、極めて巧妙であることがわかります。祭り終わりを待つこと、すなわち定められた宗教的規定を守ることによって、その意味での社会的秩序は守っているのですが、商売で用いる升や分銅には不正があり、本来はあってはならない人身売買や不正

な商売を望んでいるからです。アモスの時代にどれぐらい律法の規定が有効であったのかは不明ですが、彼らは、外見上は律法を守りつつ、不正を働いていたのです。合法的な不正という表現は言い過ぎかもしれませんが、そのような事柄が行われていたということです。

預言者アモスの時代は、社会全体が混乱したひどい時代かというところではありません。ヤラブアム2世の時代（紀元前782年頃から紀元前753年頃）イスラエルは、外交的に上手にふるまい、領土は回復して、王国は経済的には豊かでした。しかし、だからこそ、より多くの豊かさを得ようと、不正がはびこってしまっていたのです。しかし、先に見た通り、アモスが批判している人びとは、主なる神様をまったく無視しているわけではありません。彼らは、主なる神様を信じない人々ではないのです。「新月祭」と「安息日」を守っていますから、形式上はイスラエルの律法・宗教的慣例は守っていたのです。しかし、内実は主なる神様をなんとも思っていない人々でした。

このような人々は、『聖書（旧約）』においては、最悪といえます。主なる神様を信じないと公言する人々、そのような人々は良くはないのですが、彼らよりも良いのです。立ち返る可能性があるからです。主なる神様を信じていますと公言し、しかし裏では不正を行う人々も、良くはないのですが、彼らよりはまだ良いのです。裏で行っている悪が表に出たときには、主なる神様が正しいことがわかるからです。しかし、律法・宗教的慣例を守りながら、律法の範囲内で、あるいは解釈次第で、いわば合法的に不正を行う人々は、最悪です。主なる神様の存在自体を貶めてしまうからです。

だからこそ、主なる神様は、預言者アモスの口を通して、そのような人々に対して「主はヤコブの誇りにかけて誓われる。『わたしは、彼らが行ったすべてのことをいつまでも忘れない。』」（8:7）と語ります。主なる神様が決してそのような不正を見過ごしていないと語るのです。

「アモス書」は、本日の箇所のと、終わりの日、第5の幻、そして、主なる神様が全世界の神であることの提示と、イスラエルの復興を語り、終わります。その後の歴史は、決してアモスの預言の通りとはなっていませんが、「アモス書」が触れたそのような神と富との関係は、今日の福音書にも関連しています。

本日の福音書のお話は、「不正の管理人の譬え」という「ルカによる福音書」独自の記事です。簡単にあらすじを述べますと、ある金持ちの管理人が不正を行っていて、それが露呈してしまった。当然解雇されるのだが、その管理人は、自分の雇い主である主人に対して負債がある者を呼び集め、その負債を軽くすることによって恩を売り、解雇された後の道を用意しておきました。不正を重ねた上にさらに主人に損失を追わせたわけですから、とんでもない話なのですが、主人はその管理人の利口なやり方を褒めたという流れです。

内容的にかなり首を傾げてしまうお話です。またイエス様が、この譬えのまとめとして後に続けている言葉も、素直に受け取りにくい内容といえます。

「そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる」（ルカ 16：9）にある、「不正にまみれた富で友達を作りなさい」は、そのまま「ぶどうの木」の皆さまに伝えるのはどうかと思ってしまう（カードにして配るのはできないと思います）。「聖句」を覚えることは大切ですが、ここは覚えなくてもよいですと思ってしまう。

さらにイエス様の言葉は続きます。「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である」（ルカ 16：10）。これは格言のように正しいのですが、「だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか」（ルカ 16：11）と述べられると、一体この物語の管理人は何に忠実だったのか？と首を傾げてしまいます。

このイエス様の言葉を理解するには二つの事柄が重要です。一つは、「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」（ルカ 16：13）という最後の言葉です。「仕える」と言う言葉は、奴隷となるという意味もありますが、奴隷の主人がひとりであるように、主なる神様に対しては二者択一的にしか仕えられないということです。もう一つは、「忠実」という言葉です。「忠実」という言葉は「信仰」とも訳すことができます。私たちは、「信仰」というと「行動・行い」ではなく、「心のあり方」などと思ってしまうのですが、『聖書』の中の「信仰」は、主なる神様を主人として仕え行動することです。心の方向と行動とが一致を前提としていますが、行動が優先されるのです。この譬えはこれら二つのことを前提として初めて理解できます。

主なる神様に忠実であることとは、富に対しては忠実ではないこと意味します。だからこそ、主人の富に対して不忠実であった管理人ですが、自分のために行ったとは言え、負債のある人を助けたのですから、それは主なる神様に対して忠実であった、正しいとされるというのがイエス様の判断です。そもそも富はすべて主なる神様から来たのであり、その富が特定の人間に集中して維持されることは、イスラエルの本来のあり方ではないからです。少々乱暴ですが、イスラエルに存在してはならないはずの貧しさが存在し、そして、その中で生きなくてはならない人びとの姿を見てきたイエス様だからこそ、語ることのできた言葉といえます。

『聖書（旧約）』において、主なる神様に対して信仰的に正しい人が、富も備わって経済的にも豊かになる、しかし、その富は集中し続けることなく、最終的にすべてのイスラエルに分配される、それが理想です。主なる神様を信じる集団であるからこそ、その信じる人々すべてが平等に豊かになること

が理想なのです。そのことはイエス様の時代も今も同じです。しかし、現実社会は、その理想の通りではまったくありません。現実社会が理想とは異なり、格差の多い社会であることは、「アモス書」の時代もイエス様の時代も同じです。教会が社会に大きな影響力を持っていた時代も、経済的な営みについて理論と法を整備するようになった時代においても、また共に富を分かち合う思想が誕生してからも、経済的な格差が無くならないという意味では同じであるといえます。しかし、だからこそイエス様は、人間は何に仕えるべきかという基本的な事柄を明確にしているのです。

イエス様のこれらの言葉は、地球規模からいえば豊かの地域に住んでいるわたしたちには、簡単には受け止められないかもしれません。またその言葉を具体化することは、さらに困難かもしれません。しかし、「アモス書」の時代から共通するような経済的な格差・貧しさがいまだに地球上に存在し、その中で生きなくてはならない人びとの苦しみがある以上、忘れてはならない言葉です。そして、わたしたちは何を信じているのか、何に対して忠実であるのか、それをあらためて教える言葉であると思います。

本日の使徒書に、「神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます。神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。」(2:4-5)という部分があります(後半部分が本日のぶどうの木のカードの聖句です)。教会に集まり、主なる神様を信じるとは、自分たちだけの救いを信じるのではなく、主なる神様がすべての人を救おうとされていることを信じることでもあります。それは、主なる神様とは、「アモス書」が最終的に示す通り、イスラエルという枠組みを超えた神であるからです。その神をイエス・キリストを通してのがわたしたちです。

そのイエス様は、「どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」(16:13)と語っています。わたしたちは、主なる神様に仕える存在です。富はもちろんですが、経済的理論に仕えるものでも、政治的理念に仕えるものでありません。そして、わたしたちが仕える主なる神様は、使える道を、イスラエルという枠組みを超えて、すべての人に開いておられます。ことに年齢に関して言えば、幼子から人生の大先輩まですべての人に道を開いておられることを、わたしたちは本日の礼拝で改めて確認しました。そのような招きを受けていることを心から喜びたいと思います。そして、イエス様の教えをわたしたちの教会を通して、礼拝において、そして教会の様々な歩みにおいて、具体化する努力を、ご一緒に続けたいと思います。